

東京新名所

好枝

東京新名所

平栗 好枝

二〇一〇年の十一月初め、十月二十一日に完成した「羽田空港国際線・新ターミナル」と「川船からスカイツリーを見る」ツアーに出掛けた。どちらも今話題のスポットである。

羽田空港は久し振りであった。

子供達が小さい頃見学に行った以外、かなり前、国内旅行の、帰りは飛行機で羽田着、という旅行で寄ったことがあるのが数回と、それ以来だから二十五・六年ほどたっている。その間、行っていた海外旅行は、成田空港だったからである。

テレビなどが、開港前から先行して、いろいろと情報を伝えてくれていたから大体わかっていたが、実際来てみると見物の人が多くやはり右往左往してしまった。それにツアーだから時間も限られていて、せわしないことこの上なし。

地上5階建て、延べ床面積15万9千㎡の一大旅客ターミナルだ。出発ロビーの、すじ雲をイメージしたという大屋根は、旅人を包み込むように高く広がっている。よく見なかったがトイレなども多機能が施され、それに、日本の国際空港で初めての補助犬の専用トイレなどもあるという。とにかく、人と地球にやさしい空港として数々の工夫が凝らされているようだ。

出来れば私はまだ完成はしていないらしいが、D滑走路を見たかったのである。遠くにチラッと見えただけで、立派なパンフレットにも説明は出ていない。

D滑走路は、東京湾に杭を打ち、海に張り出し、その上を使用するのである。その構造に興味があったのである。

羽田に待望の本格的国際路線が誕生した、「世界の羽田」を目指す、などというキャッチフレーズだけでも気の入れようはすごい。都心からも近く、大幅に便利になるそうで、おおいに盛り上がっているようだ。そんな騒ぎを横目で見ながら、同じ国際線の成田飛行場建設は一体何だったのだろう。と考えたりした。

と同時に、きれいな飛行場に立ちながら、もうおそらく絶対に、ここから飛行機に乗り、海外になど行くことはないだろうと思ったりしていた。

そんな感慨を残し、時間にせかされるように羽田をあとにし、次の予定、川船に乗るため再びバスに乗り永代橋の船の発着所に急いだ。

出発前、添乗員さんに聞かされてはいたが、以前乗ったことがある屋根付きの遊覧船ではなく

、にわかごしらえのような安定感はあるそうだが、平べったい大きな船だった。スチール製の腰掛が人数分（四十二人）並んでいる。

隅田川はうねりが大きかった。だから少々こわかったし、酔わないか、などと心配したがすぐに支流の小名木川に入り、流れはおだやかになった。

船の責任者兼船長という人がおもしろく、

「オレが船長で後ろで操舵手をやってるのは、オレより偉い人」

などと言っていたが、奥さんなのかも知れない。いろいろと話題を投げかけ、航行中、客が退屈しないように気を配ってくれていた。

江戸幕府は掘割を網の目のように作り、ここ深川界限も俗に「水の街」といわれ水路の恩恵を受け発展した。そんな小さな川をいくつか曲がりながら船は進んだ。

橋も多く、通行している人達が立ち止まって手を振ってくれる。この船に乗るにはどうすればいいのか、問い合わせなどがかなりあるのだとか。

そして……

「私が七つ数えるから、いいと言ったら目を開けて下さい。その時、お願いだからオーッ、なんていわないで、素晴らしいッ、とか、素敵ッ、とかいってね」

と、自信ありげに念を押し、支流のドンヅマリのような場所の所で、

「ハイ、目をあけていいよ」

と言う船長さんの声で、皆はいっせいに目を開けたのだろう。その瞬間、

「ワーッ、すごいッ」

と、口ぐちに叫んでいた。女性客が多いのでそうぞうしいのである。

だが、この景色は確かに、ここでしか見られないものだと思った。

スカイツリーが目の前に大きく見え、それが川に映っているのである。

しばしの間、船は舫い、全員沈黙してみとれていた。すべて出来上がった時、再びここで見たいと願いたいそれは叶うかどうか。

陽も落ち、いつの間にか冷たい風が吹き始め、川面に小さなさざなみが立ってきた。船の前の方で一人席に座っていた私はマフラーを巻きなおし、暮れなずむ下町の風景を、川からゆっくり眺め楽しんだ。

おっちゃん

平栗 好枝

戦前、戦後を通しての事だから古い話だ。

私が疎開した先は茨城県の利根川ぞいの小さな町だった。そこに紺屋をやっていた親戚があった。「大黒屋」という。

京都の町屋のような造りで、真ん中に通路があり、右側は部屋が続き、片方には藍の入った瓶がいくつも並んでいた。その先の広い洗い場で濯いだ反物は、奥行き深い庭に干すのだった。

私達子供は、その反物の下を潜っては遊び、竈の火加減を見ている叔父によく叱られた。

叔父というより、私にはおじいさんのような風采に映っていた。勿論歳など分かるはずもないし、とにかく遊びに夢中だったから、顔さえまともに見たこともなかった。

大きな竈には、いつも大きなお釜がのっていた。染め物に使う染料を煮ているのか、布を染めているのか、竹で出来た火吹き竹を持ち、背中を丸め、いつも竈の前の小さな椅子に座り、火の加減をジッと見つめていた。光線の加減などにより、その姿は余計に老人に見え、子供心にも奇異な印象だった。

名前は知らない。皆は「おっちゃん、」と呼んでいた。

その人は、私の母の姉「お竜さん」の夫だった人である。

「おっちゃんは、お竜さんに惚れぬいていたからね」

母をはじめ、人々が集まるとそんな噂話しているのを、私も度々聞いたが、「惚れる」などと言う言葉の意味など、当時の私に分かるわけがない。理解できたのはずっと後になってからだ。

お竜さんは、終戦の少し前に「食道ガン」

で他界した。体を震わせながら、ソーメンを食べていたのを垣間見たことがあった。器量がよく、大分昔のことだからおこそ頭巾などを被って出ると、人が振り向いたそうだ。

「同じ姉妹なのに、姉は本当にきれいだったからね」

母は健康そうな感じだったが、私の淡い記憶でも確かに、お竜さんは色白で背の高い、きれいな人だったように思う。

惚れ抜いた妻に先立たれた、おっちゃんの悲しみがどんなものだったのか……。言葉では言い表すこともできず、仕事である竈の火を見つめつづけることで、どうしようもない辛さと、孤独に耐えていたのかも知れない。

おっちゃんには、私にとっては従兄弟達となる子供が何人か居たと思うのだが、当時母が言っていたのは、「依怙地になり、その寂しさの心の内は見せなかった」ということだ。

一昨年、夫と死別した友人は、今でも話すたび涙を浮かべる。子供がいないので心細さは尚更のようだ。その悲しみと寂しさは深く未だ癒されない気持ちを持って余し、どうにもならないことが分かっている、どうにもならないらしい。

近頃、私自身も、自分の隣に孤独の影が忍び寄ってきているような気がする。若い時には、周囲の煩雑さから孤を楽しみたくて、

「あーあ、一人になりたい」

などと粹がって、叶わない苛立ちに焦れたりしたものだが、そんな甘ったれたものとは違う、経験したことのない妙な力で、心の隙間に入り込もうとする。どうやらそれは人が歳を重ねるにつれ、離れることなく、人生の最後まで付きまってくるものようだ。

今年のお正月、久し振りにおっちゃんの方の親戚の人から、年賀ハガキが届いた。

「懐かしいなあ」

そう思うと、あの頃が、脳裏をよぎった。

そのハガキの向こうに、竈の前に座り、誰にも分かってもらえない寂寥感に一人耐えていた、遠い日のおっちゃんの姿が浮かんだ。

(平成二十一年二月 課題「孤独」)

おわら風の盆

おわら風の盆

平栗 好枝

あー、やっと来ることができた。

ここが八尾の町……おわら風の盆の里だ。

私が、富山県八尾町の「越中おわら風の盆」のことを知ったのは、三十数年前だった。

その頃、人気のあった男女二人の俳優が演じたテレビドラマの中に、このおわらの踊りが入り、そのバックに流れていた、鼓弓と三味線と太鼓の音が忘れられなかった。

盆踊りの音楽といえば、どこも賑やかなものだが、八尾のそれは違っていた。哀愁に満ちた、えも言われぬ音色であり、初めて聞く旋律だった。以来それはずっと私の心の中で鳴りつづけた。

昨年、私の住む立川市が、市の祭りの一環として八尾からこの「越中おわら」を招聘した。それはドラマで見たのと同じだった。

その時、私はどうしても本場で、本物の雰囲気につれてみたいと思った。そしてこの度、友人二人の連れができ、バスツアーだが念願叶い、なんとか来ることができたのである。

八尾のある富山県は日本海に面し、富山湾を抱き抱えるように位置している。黒部、立山、白馬岳など名だたる連峰が周りに控える景勝の地でもある。

遠くまで来たなあーという気がした。

出発十日ほど前に私は持病の腰痛になった。諦めきれぬはずもなく、必死の執念での治療を受けた。それが功をそうし、小康を得たが不安を抱えての長旅でもあった。

長いこと憧れていた地だったが、来てみてまず意外だったのは坂が多い地形だということであった。大きくはないが川を渡り、それにそって登り坂になり、その先に町があった。町中も起伏が多い。わずかな平地がところどころにあり、そういった辺りで町内ごとに踊るのが、町流しといわれるこの祭りのハイライトで、これを見るのに苦労したのである。小学校の校庭にできている演舞場で見ると違い、間近で見られるのだ。

「舞台での踊りを見るのもいいけれど、やはり、おわらといえば、町流しを見なければね」

「でも、どこに行けばいいのかしら」

「暗いし、さっぱり見当もつかない」

不案内だし、町流しの情報がぜんぜん掴めずいたずらに時は過ぎ、結局町流しの醍醐味はあじわえず、坂の町が恨めしく映った。

三百年の歴史をもつ「おわら」には、その語源にいくつかの説がある。元禄年間「八尾」の開祖米屋小兵衛の子孫が保管していた、町建ての重要秘文書の返済を得た喜びとして三日間、唄、舞、音曲など町内総出での祝いで、練り回ったのが始まりという説。また豊年を祈り、藁の束が大きくなるように、との思いから「大藁」が転じて「おわら」になったという説などである。

立春から数えて二百十日は九月一日ごろにあたり、この前後には台風のくることが多い。この頃に風害が起きぬよう祈る祭りとして行われてきたらしい。先人の叡知と季節感が「風の盆

」を生み、そして栄えてきた。

今も昔も五穀豊穡を祈る気持ちに変わりはない。ちなみに五穀とは、米、麦、アワ、豆、キビのことであり、食の原点でもある。

「越中おわら風の盆」とは、大体この様な由来からきている祭りらしい。

それにしてもこの踊りの見方もその所作もむずかしい。この地の人々が風土と伝統の中から身につけてきた舞であり、土地の人にしか分からない誇りの有り様なのかも知れない。

「一回来たくらいでは何も分からないわね」

「遠いし、何回も来られそうもないしね」

最後は、諦めと愚痴になってしまった。

それにしても、叙情豊かで気品高いあの独特の幻想的な音響の世界を、身近に感じられただけでも、はるばる来た甲斐があったというものである。

越中おはらで楽器を演奏する人々のことを、

「地方」（じかた）といい、三味線の弾き語りに、かれた太鼓の響きが加わり、見事な脇役を演じている。かれた響き、というのははじけるように反響するのではなく、和紙を叩くような、素朴な音とでもいうのだろうか。

鼓弓は明治四十年代に取り入れられたのだという。その独特の音色が「風の盆」を決定的に印象づけ、それに鄙びた風情の唄が加わる。醸しだされる哀音に、踊り手が手を合わせ打つ姿も重なって、ぼんぼりの淡い光のなかですべてが一体の影となる。それが夕闇のなかを彩々と動きまわるのだ。

滞在僅か七時間あまり。決して堪能できたとは思えない。ほんの僅か垣間見た「おわら風の盆」だったが、盆踊りという域を遥かに超えたこの祭りは、格調高く、奥の深いものであった。山里の中で何百年も育まれ、これからも人々の心を捕えてはなさないだろう。

また訪れてみたいと心を残しつつ、漆黒の闇のなかを今夜の宿、金沢に向けて再びバスに揺られ「八尾」を後にした。

はるか遠く、町の道に沿ってぼんぼりの灯がうっすらと見え、かすんだ半月が山々を白く照らしていた。

越中で立山 加賀では白山

駿河の富士山 三国一だよ

八尾よいとこ おわらの本場

二百十日を おわら 出て踊る

(平成二十年十一月 課題「月」)

高級レストラン

平栗好枝

夫が、検査のため二週間ほど入院することになった。

思いがけない有給休暇のプレゼント。

なにからやろうかと、心が騒ぎだした。

とにかくまず主婦としては、家の中の整理などをやりながら、ゆっくりと計画を練ることにした。楽しみが控えていると思うと掃除なども苦にならないからおかしなものである。

かなりたまっているストレス発散のチャンスだし、これから数日はとにかく好きに使える私のプライベートタイム。と、考えてきて、

待てよ。すべて私が使えるわけではないのだ。何日かに一度は病院に行かねばならないし、何日も家をあけて、旅行になどいけそうにもない。それに考えてみれば、かたづけなければならない雑用もたくさんあるわけだし。そうすると結局、大型休暇などではないのだ。

「なーんだ。つまらない」

ふくらみかけたフーセンが少ししぼみかけた。

大体すべて自分の時間だなどとはやとちりしたのが私の間違い。そんなに暇な日々が簡単にできる筈はないのだから。

とは言うものの、そんな中で何をやったら私にとってベストなのだろう。そう考えていたが、実は以前からあたためていた計画があったのである。

それは、高級レストランか、料亭に一人で入ってゆっくりと食事をする、であった。それも半端ではない、超一流のところである。

しかし、それを実行するにはやはり準備が必要だ。まずお金、全身のドレスアップ、そして何より心が落ち着いていなければならないだろう。よし一日か二日でその心構えを整えてみよう。

そんなことにはほどとおい格好で夢を描きながら、掃除や洗濯をしていた私の耳に、テレビがああニュースを伝えていた。

ある高級料亭での食材の使い回し事件のことである。私は信じられない思いで聞いた。

別にそのお店に行くつもりはなかったが、他の店でもあるいは、などと余計な危惧を抱いてしまう。清水の舞台から飛び下りるくらいの散財であり、冒険に近いことをやろうとしている私にとって、そんないい加減な食事の席につきたくはない。

と、まあ偉そうに思ったりしていた。

そうこうしている間に、自治会の会費の集金の依頼やら、前から予告のあった、部屋の補修の日が早まってしまった。

「なんだよ。もう」

辺りの物を蹴飛ばしたいくらいに私は腹がたってしかたがなかった。しかし、落ち着いて考えてみれば、初めから少し無理な計画だったかもしれないのだ。ザワザワとした雰囲気を引きずりながら行ったとしても味などわからなかつただろう。こうゆうことにはやはり機、というものがあるようだ。

だが、たとえ大幅な計画はつぶれようと、このまま中止するのは悔しい。

少しの時間でまねごとでもいいから、何かないかと考え、結局、近くのデパートのレストランで優雅、とまではゆかなかったが、家から近いという安心感だけで、時間的にはゆっくりと食事をして終わった。

普段やってることと、たいして変わらないことで何となく納得はしてはいないが、中央線の事故続きで都心になど出なくてよかったのかな、などと、たかが食事を食べるだけなのに、疲れてしまった。

張り切ったわりには、超豪華な所にはやはり縁がなかった。

でも、そのうち絶対にどこかで冒険してみようと思っている。

数日後、夫は何事もなく帰宅した。

平成二十年七月

課題「冒険」

形見

平栗好枝

我が家の調度品の中では古い方の部類に入っていた、柱時計と猫こたつの話である。

時計の方は結婚した時両親が買ってくれたもので、時折ネジを巻くようになっていて、忘れると針を進めるのをさぼった。そして、数年に一度は分解掃除をする。

父が時計職人だったので、そのへんのケアはすべて任せっきりだった。

文字盤の中央には日本が誇る時計のブランド名、セイコーの文字がローマ字で横にくっきりと書かれている。父が吟味してくれたのと、機械の質がよかったのかよく働き、おだやかな音色で時を知らせた。

しかし、時代は移り、電池式の目新しい製品が出回るようになってきて、その時計はいつか箱などに入れられ、お蔵入りとなってしまった。たまに荷物の整理などでその箱を動かしたりすると、それでもボン、ボンと、ハットするほどのきれいな音で、自身を主張するかのようになり、私の心を痛ませた。

何とかもう一度、掛ける場所を作りたいと思いつつ、コンクリート壁ではそれも叶わなかったのと、おだやかな音色でも、一時間毎に時を告げられるのが夜中も続くと、現代の生活に合わなくなっているようにも思え、動かすこともなくきてしまった。

半世紀以上も手元に置きながら、その半分ほどを押し入れの中で虚しく過ごさせ、時計としての役目を奪ったような気がして、時計と、それを贈ってくれた父に、良心の呵責を感じていた。

いつか自分で納得のゆくかたちで何とかしなければ：：。ずっと気にかかるものの、ひとつになっていた。

猫こたつの方は、年数からいえば悠に百年くらいはたっている代物である。泥で作られている。キャンプのテントのような形で、四隅が空いていて、そこから炭を入れた器を出し入れする。縦横三十センチくらいの小型で布団を掛けて足を入れると、なんともいえない温もりがあった。猫にとっても好きそうな所である。それで「猫こたつ」というのかも知れない。これも、結婚して間もないころ夫のお姑さんから私に譲り渡されたのだと思うのだが、経緯などは覚えていない。

私の来るずっと前からあったらしいので、かなり古い物なのだろうとの推測はついていたが、詳しい事を聞いておけばよかったと今更に後悔している。もうこのような珍品にはお目に係ることはないだろう。

時計はとにかく「猫こたつ」などは十分に、骨董品としての価値があったのではないかと思う。骨董といっても、床の間などに置くものではなく、最近よく見かける公園や、お寺の境内などで開かれている、骨董市などのことである。あんな所に持っていったら結構珍しがられるのではないかと、何回も持って行こうとしたが、車が無いので運ぶことができず、結局、思い切ってゴミ置き場にだすしかなかった。

しかし、出したものの、やはり翌日取り下げにいったのだがすでに遅かった。

驚いたことに、そのような所で目ぼしい物を見つけ持って行く人がいるのである。捨てたのだ

から、私にはもう何の権利もないわけで諦めるしかなかった。

「時計も」、「猫こたつ」も調度品とよぶには小さいものだったが、遠い日から日常生活における密着の度合いは濃く、愛着があった。

思い出という時を刻んで去った二つのものは、私の胸のうちでは、父と義母の忘れられない一
双の形見だったのである。

平成二十年九月

課題「刻む」

名画

平栗 好枝

地デジ、地デジとせかされる感じでテレビを買い換えた。

店員はリモコンのスイッチボタンを魔術のよう操り、いろいろとやって見せてくれたが、いざ来てみると、店で見た時と画面の色など少し違うような色彩に映り、ガッカリしたが仕方がない。ボタンの数も多く、操作に慣れるまではやはりひと苦勞だった。

それはとにかく、今までのテレビでは見ることができたビデオの録画が見られなくなってしまい、それが一番残念なことで、めずらしくこの点では夫と意見が一致した。

最近もいい映画はたくさん製作されているが、昔の映画には現在のものと違う豊かな抒情が溢れていたように思う。

それが見られなくなるのは、すごく損をしたような気分になり、何とかしたいと方法を模索したりしている。

保存してある録画のうち、「砂の器」「眼下の敵」「道」それに「ローマの休日」「ここより永遠に」などはすばらしく、この五本が特に私のお気に入りだ。

邦画はたまたま一本だけだが、これは日本映画の名作ではないかと思われるもので、松本清張原作「砂の器」だ。三〇年ほど前に制作された作品である。

ある朝、蒲田の電車区の操車所で死体が発見されることから物語は始まる。石川県や島根県の亀嵩という所の方言から犯人を割りだしていくのだが、昭和十三年頃の設定というそのままの雰囲気の風景などがすばらしい。調べていくうち、以前は業病といわれた、ハンセン病が絡んでいく重いテーマだ。

中心的捜査にあたるのが、当時四〇歳くらいの、丹波哲郎であり、若き日の今は千葉県知事の、森田健作であった。

最後の詰めの捜査会議で、丹波刑事が「犯人の父親が、ライ病だったのであります」

そうはっきりと言ったのだった。

その後、ハンセン病の人達の、温泉旅行などが問題になり、丹波哲郎さんが他界したときも、監督の野村芳太郎さんが身罷った時も、期待したが何故か、再放送はなかった。

映画の最後に字幕で、

「今ではいい薬も出来て完治できるようになり、そのためにおこる不幸は、もう過去のことになった」というような言葉で締めくくっている。

私はこの映画で初めてハンセン病という病気を知り、原作も読んでみた。

その病を隠すために起こした、悲しく哀れな殺人事件であった。

映画のクライマックスで流れる、芥川也寸志さん作曲の、オリジナル曲、「宿命」という題名の音楽が全体を盛り上げていた。

犯人の作曲家の、この曲作りの過程と、事件解決への過程を交互に描写し、収束方向に向けながら、逮捕が近いことを示唆していく。見終わってから心に残る可哀そうな場面であった。

この「砂の器」を筆頭にした五本だけではなく、他にもいい映画を録画してあるビデオを残したいと思うのだが。

平成二十年七月